
白の魔術師

Marlowe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白の魔術師

【Nコード】

N2276P

【作者名】

Marlowe

【あらすじ】

特異（霊媒体質）な体質の主人公を中心とした恋愛ファンタジーです。

まだあらすじも決まりきっていないので決まり次第こちらは編集します。

処女作となりますので、未熟な文であることをご理解の上でお読みいただければ幸いです。（アドバイス歓迎！）

基本的に通勤時間に携帯より更新を行う予定ですので、更新頻度は低いです。

旅の共（前書き）

処女作となりますので、未熟な文であることをご理解の上でお読みいただければ幸いです。（アドバイス歓迎！）

基本的に通勤時間に携帯より更新を行う予定です。申し訳ありませんが更新頻度は低いです。

旅の共

比較的暖かい土地に雪が降った。

深夜から降ったそれは昼過ぎに止み、翌朝には見事に路面を凍結させた。

彼女はいつものように水を汲みに外へ出て、間もなく……

程なくして少年は家の前に昏倒している祖母を発見する。

すぐに最寄りの村の医者を呼ぶが、彼女の意識が戻ることは無かった。

少年はその数年後、旅に出た……

「なあ、お前ってゲイなの？」

「はあ!？」

心当たりが微塵もないことを聞かれ、青年　ディアは慌てて過去の行動を振り返る。

一月程前、今いるような酒場で出会い意気投合して共に行動している質問の主　ナカとはそのような事は一切ないし、他にもやはり思い当たることは無い。

「え、なんでそんな事聞くに到ったわけ？」

「いやだってお前、あんな可愛い子がお前のこと気にかけてるに、何で逃げるのさ」

ここ数日で何度も投げかけられた質問だ。

前の質問に確たる根拠がないことに安堵しつつ、こちらも何度も返している回答を嘆息と共に吐き出す。

「だからあの子怖いんだって……」

「何が怖いんだよ。あんな見るからに清楚なお嬢様って子が。」

確かに、相手は見るからに身なりもよい、清楚で可憐な女性だ。

ディアとて好みか好みじゃないかと言われれば、とても好感のもてる相手だ。

「まあ良さそうな子だけど……」

「だろ？」

「でも彼女、俺のことあからさまに警戒って言うか、敵視してるって言うか……」

ナカはそれを聞き大げさにため息をつく。

これもここ数日で何度も見た光景だ。

「だからお前あんなに優しく話しかけて来てくれるのに何でそう思うのかな」

「何でつてそう感じるからだよ。
ナカ、俺先に乗合場に行ってるから後でな。」

突然後半が早口になり、焦ったようにその場を後にするディアをナカは呆然と見送る。

口を挟む間すら与えなかった彼は、明らかに自分が食べたものより高額な硬貨を一枚、卓上に残していった。

道中、路銀が足りなくては自分に泣きついてきたことがあった彼に、本来ならそんな大盤振る舞いをする余裕は無いはずだ。何故急にそんなに慌てて出て行くのかな。と一人ごちてディアの残した料理に手を伸ばすと、聞き覚えのある声に話しかけられた。

「こんにちは、ナカ。ディアはまたどこかへ行ってしまいましたね
…」

その声は静かだが、にぎやかな酒場にもかかわらずナカの耳にははつきりと響いた。

真っ白生地に赤のラインが入ったな上等なロープに身を包んだ女性は、困ったような悲しそうな笑みを浮かべる。

見るからに大事に育てられてきたであろう箱入りそうな彼女は、人にそのように接された経験があまりないのだろう。

彼女のその顔に、ナカはディアに対して軽くはない怒りを覚えつつ笑顔で空いた席へ彼女を促す。

「何でも急ぎの用事があるらしくてな。良ければ一緒にどうだい？」

「良いのですか？」

「もちろん」

「ありがとうございます」

ぱっと花が咲いたように笑顔になる女性。
ナカの心に温かい気持ち広がる。

(どこをどうやって見たらこの子が怖いんだか…)

良いところのお嬢様であることは間違いないが、当初の予想ほど世間を知らないわけではないし、庶民の自分にも快く接してくれる。
現に、「高貴なお方達」は好まないこのような酒場に来て、自分と席を共にまでしてくれる。

女性は通りかかった店員に声をかけると飲み物と食事を注文して、食事の邪魔にならないよう腰まで伸びる長いブロンドの髪を一つに結んだ。

間もなく、女性に飲み物が届けられたタイミングで、ナカは意を決して話を切り出した。

「なあイーリス、なんでディアを追っかけてるんだ？」

すると女性　イーリスは飲もうと持ち上げたグラスをテーブルに戻し、眉尻を下げて口にした。

「……気になるところがありました。」

「気になること？」

「はい…」

それだけ言うとイーリスは黙り込む。

それは拒絶ではなく、言葉を選んでいようであった。その様子を見てナカは心の中でため息をつく。

（望みなしかあ……。）

それほど相手のことを知っているわけではない。

そもそもまともに落ち着いて話したのも今が初めてだ。

初めて会ったとき、それこそイーリスがこちらに話しかけてくる前から気になっていた。

そう。一目惚れというやつだ。

だがそれはディアも同じだったのか、彼もイーリスが視界に入った瞬間からいつもと様子が違っていた。

それなのにディアはイーリスが近づいてきた途端にどこかへ行ってしまった。

イーリスは会うたびに声をかけてくる。その度ディアはどこかへ行ってしまう。

どこまで奥手なんだか、という微笑ましい思いと共に、決して小さくは無い嫉妬心がナカを支配する。

いつも、イーリスはディアに用事があるようなのだ。

（俺とあいつでなーにが違うんだらうなあ。あいつとイーリスなんて挨拶すらしたことがないのに）

ナカは次の言葉を覚悟を決めて待った。

実際にはものの数秒だったかもしれないが、ナカにとってはとても長い沈黙のあと、彼女は戸惑いながら言葉を発する。

「うまく、表現できないのですが……」

「うん」

「彼のことか心配で……」

「うん（母性本能かあ……。）」

「うう、良くない雰囲気をするのです」

「うん（あいつ確かにちょっと頼りなさげだもんなあ……。）」

「混沌というか……」

「うん（……。）」

「負の力というか……」

「うん（……ん？）」

「そういった好ましくないものを感じるんです」

「うん（あれ？なんかちょっと違う？）」

「そういう気をまとった方って大抵何かに取り付かれたりしているのですが」

「うんうん」

「ナカさん、何か彼に特殊な行動とか、気になることとかありませんか？」

「なんだそついう事だったんだ」

「え？」

「いやいや、気にしないで」

安堵から思わずにやけそうになり、考えるふりをして口元に手をあてる。

まだ望みはある、と俄然やる気の湧いた彼は饒舌になり、

「俺の見る限りでは、特に変な印象は受けないよ。でも俺とあいつ、ちよつど一ヶ月くらい前に知り合ったばかりだから、なんとも言えないかなあ」

「そうだったんですか。仲がよさそうにお見受けしたのもっと長いのかと思いました。」

そして

「うん。酒場で知り合って、たまたま行く方向が一緒だったから一緒にいるだけで、付き合いは短いのよ」

「なんだか自由な感じで素敵な旅ですね」

大胆になった。

「うん。俺たちマジスナに行くんだけど、もしイギリスもそっちの方向に行くなら一緒にどうだい？」

馬車に揺られて

街から街への交通手段は、徒歩か乗合馬車が一般的である。乗合馬車は無い街もあれば、日に2〜3台出る街もある。

今ディアが滞在している町は月に一度馬車が出ており、5日の足止めで済んだのは運が良かったといえるだろう。

ディアは停留している馬車に乗り込み、人でぎわう商店街を眺めた。

(これであの子と会うこともないといいんだけど…)

そう思うと心中でため息をつく。

(本人が悪い子じゃないのはわかるんだけどね……。……………ナカ来なかつたりして…………)

ナカが一目で彼女に好意を持った事にはすぐに気付いた。

自分は違う理由で彼女を観察していたのだが、とうやらそれを同じだと勘違いされたことも。

その結果、何度も何度も「どうして逃げるんだ？」と聞かれた。

彼個人が彼女と話すチャンスなら、自分が去ったあとにいくらかあつたはずだ。

実際一度去った後に二人の様子をうかがってみれば、楽しげに話している姿も見かけた。

だが、ディア本人が彼女を避けているので「出し抜く」というわけではないが、自分だけが彼女と親しくなるのには抵抗があり歯がゆく思わせたのかもしれない。

ナカのそういうフェアで、なんだかんだ世話焼きな所がディアは気に入っていた。

だから、友人の恋路を応援出来るのなら、ナカが自分と別行動となり彼女と共に行動するのも、万が一自分の望まない事態になったとしても、覚悟を決めて受け入れようかと思っていた。

そんなことを考えていると、ある気配を感じた。

隠そうともしないその気配そのは、間違いなくイーリスが近くにいることを示している。

事態受け入れようとは思ったものの、やはり恐怖心が消えたわけではなく、馬車に乗り込んでくるナカとイーリスを見て、上手く笑顔を向けられた自信はない。

実際には顔がひきつっていただけかもしれない。

自分の存在を確認するや否や、急に表情を強ばらせるイーリス。途端に気配は圧力へと変わる。

(万が一の事態になったら、二人がなんとかしてくれるかな……)

そんなことを人事のように思いながら、圧力に耐えつつ、二人がこちらに来るのを待った。

「待たせたなディア」

「いや、出発までに間に合えば問題ないでしょ」

「おう。でな、イーリスも同じ方向に行くらしいんだ。途中まで一緒に行っても良いだろ？」

「うん、いいよ」

「お？いいのか？」

反対されるかと思っていたナカは予想外の返答に驚いた。これまでの経緯から絶対に答えはNOだろうと思っていたのだ。

ナカも飾らず、媚を売らず、しっかりとしていない訳ではないが、どこか頼りなく目を離せないディアのことを気に入っていた。

そのためディアの返答に一瞬喜んだものの、いつもの人懐こい表情からは考え付かない硬い表情をしたディアに言葉を呑んだ。

「ナカ、これ持ってて」

差し出されたのは旅人が標準的に装備するベルト。

多機能になっていて、旅に必要な最低限の物が全てこれで収納できる。金も、武器も。

そのため、簡単には外れない構造になっており、あらかじめこれが装着されていなかったことが伺える。

彼愛用の短剣はベルトに刺さっている。つまり、ディアは丸腰となる。

「万が一の事態になったら、ナカが俺を止めてね。殺しても構わないから。はい、ここ座ってて」

「え？……え!?!」

事態が把握できないナカは、ディアに導かれるままディアがもともと座っていた席から手が届かない程度に離れた場所に座らされる。

「君も……イーリスだっけ？座ったら？」

「いえ。私はこのままで。」

彼女を見れば、今のやりとりで警戒心が高まったようだ。

表情からは緊張の色が伺え、圧力も増している。ディアはその圧力に耐えるのに、彼の精神は早くも息切れをし始めていた。

現状を打開しなければと早々にディアは口を開いた。

「君が、俺を警戒するのはわからなくはない。だけど俺は誰かに危害を与えるつもりは無いんだ。だから、その力を抑えてくれないかな…。正直、しんどいんだ……」

「え!？」

イリスが驚愕の表情でディアを見る。

それと共に少し、圧力が弱まった。

双方言葉を交わさずしばしの間があつたが、それ以上圧力が弱まる気配はない。

多少弱まったとはいえ、耐え難い力をかけられていることに変わりはない、ディアは全身からいやな汗が吹き出す。

イリスの表情を伺えば、先ほど向けられた敵意よりも驚愕と困惑のほうが強まっているようだった。

「……もしかして、コントロール出来ないとか？」

「……すみません何のことでしょう。」

「え!？」

イリスの顔は困惑を色残しつつも、言葉を発すると共にまた警戒の色が強まる。

同時にまた圧力が増し、ディアは思わず椅子の背もたれに手をついた。

ディアの頭を混乱が支配し始める。相手の状況を観察し、考え得る可能性を頭の中で列挙する。

「君は……もしかして神殿の巫女なの？」

「あ、はい。」

「ああなるほどそれでそんな強力な聖霊連れてるんだ……。」

「え！？見えるんですか!？」

途端に圧力が急激に弱まる。

イリスは警戒心よりも驚きのほうが増したようだ。

ディアは強力な圧力から解放され、崩れ落ちるように席に座った。

だが、現状が安心できる状況であるかはまだ分からない。

ディアは長く一息つくと、再度気持ちを引き締めるよう自身を叱咤して口を開いた。

「うん。すごいよ。そんなに大きな聖霊は初めて見る。その聖霊、君の意志や感情に呼応するみたいだね……。」

「そうなんですか……。自分では分からないのですが……。」

そういうとディアは俯いた。

声のトーンも明らかに下がっており、彼女のコンプレックスに触れたことを察したが、ディアはひとまず自分の都合を優先する。

「だから……なんもしないからちよつと警戒説いてくれないかな……。確かに俺には君が警戒するに足るものがあるんだけど、俺は自我を失ってはいないし、何より俺は君とその聖霊にはまず勝てないしさ。」

「あ……すみません!!!」

弾かれたように顔を上げたイーリスには、先ほどの強張った表情はすっかりなくなり、泣き出しそうな困ったような顔になっている。今度は思い当たるものがあつたのか、わずかに残っていた圧力も霧散する。

それを受け、ディアは危機は去つたと判断し、緊張と強張っていた表情を緩めた。

「いや、話のわかる人で助かったよ……。ナカ、もう大丈夫そうだから、ベルトありがとう」

「……お、おう」

ナカはイーリス以上に状況が掴めていない。言われるがままベルトをディアに手渡すと、それを装着するディアと俯いたままのイーリスの様子を交互に伺う。

「あ……あの……。」

消え入りそうな声で声をかけてきたイーリスを見やると、視線はすっかり下に落ち、不安げな感じが見るからに伝わってくる。

「本当にすみません……。私、力を上手くコントロール出来なくて神殿で除霊をしていたときも、取り付かれた方まで倒れていたりとかしよっちゆうで……。」

言葉の後半に近づくとつれ、まるで小さくなるように肩を窄めるイ

ーリス。

表情は何えずとも、今にも泣き出してしまいそうな雰囲気になカもディアも焦りを覚える。

思わずディアはナカを見やるが、状況がつかめていないナカにフォーができるはずも無いことを思い出し、席を立ちーリスに歩み寄る。

「うーんと……俺は除霊をしてもらったことも、するのを見たことも無いから詳しくは分からないんだけど、一つの肉体に共存した複数の精神を切り分けるのは相当に難しいって聞いたことがあるよ。実際、俺も旅に出ているいろいろな人を見ていて精神の境目が分からない人って確かにいたし、そういう人が主に自我を失って神殿へ運ばれることが多いから、除霊は特に難易度の高いことなんじゃないかな」

顔を覗き込めば、彼女は顔は伏せたまま口を開き、

「……でも、神官様達はそんなことなく、私だけがこうなんです……。それで修行の旅に……」

喋り終わると同時にディアを見やる。

不安な表情は消えないが、何とか和らげようとディアは優しい笑みを浮かべた。

それを見たーリスは強い安心感を覚え、気持ちが軽くなり顔を上げられた。

彼女の表情を見たナカが遅れを取ったと思ったのか小さく「あっ」といったのをディアは聞き漏らさなかったが、とりあえず放置。

「まあ、とりあえず座ろうか」

「はい」

今度は促されるまま座るイーリス。
先ほどは少しはなれたところに座ったディアだが、今度はナカとイーリスの近くに腰をおろし、口を開いた。

「とりあえず、俺のこと説明するよ。」

「あ、はい」

ナカは無言で頷く。なんだか無駄に敵視した視線を送られるが無視する。

「俺ね、霊媒体質なんだわ。」

「霊媒体質ですか……」

「うん。君は魔術師の魔力って感じ取ることはできる？」

「はい。貴方も一目で強い魔術師だと思いました。」

「え！？お前魔術師だったの！？」

思わず叫んでから話の腰を折ってしまったかと思い、ナカは両手で口を押さえた。

その姿に表情をほころばせつつ、ディアが説明を続ける。

「いや、俺魔法使えないのよ。」

「え？それだけ強い魔力があるのですか？」

イーリスがなにやら驚いているようだが、魔力にご縁の無いナカにはさっぱり分からない。

口元を押さえたまま二人の様子を伺う。

「うん。人って魔術師じゃなくても、少なからず無意識に魔力を使つてそこら変の妖精や悪魔に憑依されないよう身を守ってるじゃない?」

「はい。そのように習いました」

「うん。」

イーリスには基礎知識があると判断し、ナカへ視線を巡らせる。

相変わらず口元を押さえたままの体勢ではあるが、その表情から話しについてこれていることを確認しながら話を進める。

「その身を守っている力を破って憑依するにはその力の何万倍もの力を要するから、一般的に力が極端に弱まった場合か、憑依する側がよほど強くない限り憑依はされないんだけど、俺は生まれつき体外に魔力の放出が出来ないのよ。」

再びイーリスへと視線を戻す。

「だから、俺は妖精や悪魔に憑依された上で魔力比べをして、俺が勝つことで乗っ取られないよう自分を保ってるから、俺の中には数体の精霊と悪魔がいる。」

君はその悪魔の魔力に反応したんでしょ?」

イーリスは質問され、戸惑う。

「その…明確には分からなくて。だからまずはお話をさせて頂きたいと思っていたのですが……」

「うんうん。」

君のその感知能力は優秀なものだと思うよ。一応悪魔の力は隠してるしね」

「そうだったんですか…。でも魔力が使えないって、何故なんですか？」

ディアは肩をすくめる。

「さあ？生まれつきこうらしいから。婆ちゃんや両親ががんばって治そうとしたらしいんだけどね。」

「そうなんですか……」

「うん。それで、両親がマジスナにいるらしいから向かっているところなんだ」

それを聞きイーリスはしばし思案する。

その間ナカは お前って実はすごかったんだねー など話しかけ、二人はいつもの雰囲気へと戻っていた。

「……あの」

「ん？」

「よろしければ私もマジスナまで一緒にさせていただいてもよろし

いでしょうか」

「もちろん！」

他が驚く勢いで答えたナカはその勢いのままイーリスの手を握り、見るからにうれしそうに上下に揺さぶる。

「改めてよろしくな！イーリス！」

「ありがとうございます。ディアさんも、よろしいですか？」

「うん。いいよ。さんは要らないよ。俺もイーリスって呼ぶから」

「はい！よろしくディア」

ディアはこちらへ向けられる愛らしい笑顔と理不尽な軽い非難の目に、こちらにも笑顔を返しつつ、予想外ににぎやかになりそうな旅に期待と不安を膨らませた。

馬車に揺られて(後書き)

すみません後半息切れ…orz(早)
後で修正します(つ TT)

旅の基本

人でごった返す停留所を、ディアは苦勞しながら前へ進んでいた。街へ到着後、まずは停留所の広間に行くぞというところ、ナカは先陣を切って歩き出した。

この街はマジスナの隣に位置する大きな街だ。マジスナは大陸有数の大型都市で、マジスナ自体はもちろん周辺の街の人の往来はとても多い。

今回の旅が初めての旅で、経路上たまたま小規模の街ばかりを渡り歩いてきたディアにとって、これほど大きく、整備された停留所も、こんなにも多くの人が一カ所に集まることも信じ難いことだった。

ディアは時折周囲をきよろきよろと見ながらも、前を歩く二人を見失わないよう必死だった。

すでに自分の現在位置も、向かっている方向も把握できていない。二人とはぐれば、間違いなく迷う確信がある。

ナカはそんなディアの状況を把握しており、先頭を進みながらも頻繁にディアを振り返ってその所在を確認した。

まもなく広間へ出ると混雑は緩和され、ナカは半歩後ろを歩くイリスに広間の端に行くよう促し自らもそちらへ進んだ。

ディアを振り返れば、進路変更にきちんと気づいたようだ。

広間の壁沿いは休憩や荷物整理をしている人々があり、ナカも同様に手荷物を下ろすと、少し遅れて到着したディアに声をかけた。

「大丈夫か？」

「うん…、なんとか」

ディアはふーっと文字通り一息つくところ、まじまじと辺りを見回した。

「噂は聞いてたけどすごい人だねえ……。人の量もすごいけど、荷物もすごいね……」

人が増えれば商いが活発になる。

停留所には乗合馬車だけではなく、商隊の馬車なども出入りがあるため、大荷物を担いだ商人も数多く往来している。

何度その荷物にぶつかられた（ぶつかった）ことか…

小柄ではないが、線が細めのディアは弾き飛ばされることも少なくなかった。

「慣れれば避けられるようになるんだけどな、最初はしゃーないな。特に今は朝方だから出発する商人が多いんだよ」

「慣れられる気がしないよ……。荷物怖い……」

うーと唸るディアにナカは吹き出す。

ディアは恨めしげにナカを見やるが、ナカ素知らぬ顔だ。

イリスはというと、なんだか申し訳なさそうな顔をしている。

「大丈夫ですか…?」

「うん、大丈夫大丈夫。イリスが無事で何よりだよ」

ディアはヘラリと少し疲れた笑いを浮かべた。

馬車を降りる直前、ナカがイリスにこの街に来たことがあるかを確認していた。

ナカは馬車を降りてから、首を横に降ったイリスのすぐそばにいたので、おそらく彼女が被害にあわないよう誘導しながら進んでいたのだろう。

まっすぐ進むことすらおぼつかなかったディアにしてみれば、イリスを守りつつ目的の場所を目指せるナカは尊敬に値する。それを言葉にすればうざいことになりかねないので口にすることはないが

……

「ちよつとここで待ってる、明日の馬車の時間確認してくるから。」

言うが早い、ナカは言い終わる前には足を踏み出す。

その様子を見てディアは慌てて声をかける。

「あ、ちよつと待って」

「おあつ！？」

急に待ったをかけられ、ナカは人にぶつかりそうになるのを寸でのところで回避して振り向いた。

「どっした？」

「あのさ、俺路銀が心許ないから稼いでから行きたいんだ。何日滞在するかもわからないし、マジスナには一般の人が受けられる仕事は少ないって聞くし。」

マジスナは別名魔法都市と言われ、魔術師が数多く居る。

人は誰しも魔力を有するが、魔術師といわれるほど魔力が強い人はごくごく稀である。

そのため、魔法でしか解決しえないような問題はほぼすべてマジスナに集められ、他の仕事は周辺の街へ分散されるようになっていく。

「イリスはマジスナに用事があるんだよね？ナカ……良ければ手

伝つてくれない？」

「おう、いいぞ」

「本当に！？わーい！ありがとうございます！」

その言葉にディアは良かったーと呟き顔には満面の笑みを浮かべる。イリスと行動を共にしたいだろう彼が自分の手伝いをしてほしい可能性は十二分にあるかもしれないと思っていたのだが、二つ返事で快諾してくれたことが嬉しかった。

「私も、特にマジスナには用があるわけではないのでお供させて下さい」

その言葉に今度はナカが満面の笑みになる。

というわけで、一行はまず宿屋を探すことにした。

停留所から出てしまえばやはり人の交通量は緩和されており、ディアはほっと胸を撫で下ろす。

ちよつど滞在客が多くチェックアウトをする時間帯であるため、宿屋は直ぐに見つかった。

彼らは手荷物を部屋に置くと、それぞれ特に疲れもないということ で直ぐに外出をした。

「まずは先にちよつと遅い朝飯かね」

というナカを先頭に歩くと、程なくして小さな酒場に到着する。

ちよつと遅い朝食 で昼食にはまだまだ早い時間なので、こちらも宿屋同様空いていて七割ほどの席が空いている。

三人は入り口からほど近い席に座ると、各々注文をした。注文が終

わるなり、イーリスがナカに話しかけた。

「ナカは旅に慣れてるんですね。私はいつも宿屋と食事を取るまでに半日近く要してしまいます」

本当に感心しているらしく、その目には軽い尊敬の眼差しが伺える。ディアはそれを見て二人の（というかナカの）邪魔はすまいと聞き役に徹することを決める。

「大通りから目に付くような宿は割高だし空いてないんだよ。だからといって闇雲に探すと怪しい道に迷い込む可能性もあるから、今度探すときにはまず酒場に来て酒場のおばちゃんとかに聞いてみるといいよ」

「なるほど。はい、そうしてみます」

快い返事に、ナカは満足そうにうんうんと相槌を打つ。

色々の旅の小ネタをイーリスに伝授しているナカを見て、ディアは微笑ましい光景だなと口元がほころぶ。

馬車内でイーリスの聖霊に挨拶をしたら、その後は街に到着するまで頻繁に聖霊に関する質問を受けた。

移動二泊三日間のうち、初日など質問責めでなかなか解放してもらえなかったほどだ。その間ナカは話についてこれず、だが二人きりで話をされるのは面白くないらしく、少し仏頂面で同席していた。ちなみに聖霊と意志疎通をはかるとき、魔術を使えば発声せずとも意志疎通ができるようなのだが、ディアは魔術が使えないため普通に声を出して話しかける。

このため、端から見れば気がおかしい人なのかと思われてしまい、同じ馬車に乗り合わせた人には、巫女が何者かにとりつかれてしま

った人を治そうと甲斐甲斐しく世話しているように見えたらしい。最終にはイーリスはご老人からありがたやーと手をあわされるほどになっていた。

そんな背景も手伝ってか、車中でくすぶり続けたナカの軽快な話は止まらない。

話しながらのゆっくりした朝食は、昼食客で座席が半分ほど埋まるまで続いた。

「今は難儀な仕事しかないんだよ……。坊や無理するんじゃないよ？」

クエスト案内所のおばさんは困り顔でハガキサイズの紙をカウンタ―に並べる。

三人は分担して一通りその紙を見たが、希望の仕事はそれぞれ見つからなかったようだ。

「退治か探求しかないのかあ……」

探求は収入は良いが、「どこにあるのか知らないが　な宝石を探してこい」といった時間も運もコストもかかるクエストだ。

稀に物の所在が分かっている場合もあるが、それは他人の家に保管されていて結果的に強盗をさせられそうになった、などという事例

もあるのでリスクも高い。

だが個人的にも、実践経験もないイーリスのためにも、極力殺生は避けたい。

ディアはカードの詳細に目を通しながら眉を寄せる。

「おばさん、宅配とかお遣いとかは無いだよね？」

「無いなあ。そういうのはすぐに引き受け手が決まっちゃうからねえ……」

「そっかあ……」

余談だが人なつこい雰囲気、年上の女性から見ると可愛いらしいディアはおばさまキラーである。

クエスト案内所は旅の初心者のためにごく簡単なクエストを隠していたりするのだが（そうでもしないと難易度の高い物が消化されなため）、ディアの話を親身に聞いている女性の様子から見ると、本当に簡単な依頼は無いのだろう。

ナカはそう判断すると、手持ちのカードから2枚を抜き取った。

「ディア、どうする？この中りなら退治でも比較的楽そうだけど」

「うーん……」

ディアは自分の手持ちのカードとそれを交換し、詳細に目を通した。横からイーリスがそれを覗き込む。

「ブレイン…、大型コウモリ……」

どちらもわからないのか、イーリスは穴が空きそうな勢いでカード

を見入っている。

ちなみにイーリスはこの手の仕事をしたことがない。

路銀は各街の神殿に勤める事で得ていたそうだ。

ディアはその迫力に少し腰を引かせながらイーリスに2枚のカードを渡して、新たにナカが見繕った1枚を受け取った。

「その3つ位かな。ブレインが一番楽そうだけど……」

というナカの言葉を案内所の女性が遮った。

「ああ、ブレインは止めときな」

「その仕事、何かあったの？」

ディアが問うと、女性はかぶりを振りながら答えた。

「当初の目撃情報だとこれっぽっちの量だったらしいんだけどね、昨日やたら大きいブレインが目撃されたのさ。もう一般人じゃ対処が危うい可能性があるから、魔術師の先生方をお願いしようって話がでてるんだ。」

それを聞いてナカが「うえ、そりやダメだ」と同意を示す。

ディアもブレインがどのような物かを理解してるため、「そっかー、おばさん情報ありがとう」と笑顔でお礼を言い、無意識にポイントを稼いで女性の心を華やかに彩っている。

状況がつかめていないイーリスは一時こちらの話に興味は示したものの、相変わらずカードとにらめっこだ。

ディアは手元のカードに視線を落とした。

角ウサギという生き物の退治の仕事だが、引き受け済みになっている。

「おばさん、この角ウサギの仕事って誰か討伐に行ったの？」

「んー？どれどれ」

女性はカードを受け取ると、その内容にざっと目を通す。

「ああこれかい。4日前に討伐に出かけてったんだけど、まだ帰ってきてないんだね。4人組みだから、相手も20匹程度だし、まさかやられてるってことは無いと思うけど、念のための追加募集だよ。これならいいんじゃないかい？」

ディアは返してもらったカードを再度見て思案する。

確かにこの規模なら比較的安全だし、角ウサギは角を折ってしまえば温厚なただのウサギになってしまったため殺さなくてもすむかもしれない。

「イーリス、この仕事でどうかな」

先ほどの2枚のカードはもう満足したのか、他のカードを読んでいったイーリスは、読むのを止めて手元のカードを揃えながら答えた。

「良いと思いますよ。先に行かれた方の安否も気になるところです」

「決まりだね？じゃあその書類にサインと、退治の追加要員だから早めに出て先の奴らと合流しておくね。馬を貸してくれるから、これを持って東門の馬屋によってからいくんだよ」

女性はテキパキと手続きを済ませると、ディアに馬を借りるための書類と、餞別だと言って携帯用の食料を手渡し、

「相手が角ウサギだからって気を抜くんじゃないよ。怪我の無いよ
うにね」

と送り出してくれた。

一行は案内所を後にし、これから直ぐに出立することを決めると、
各々の準備のため一時解散をする事にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2276p/>

白の魔術師

2010年12月10日03時26分発行